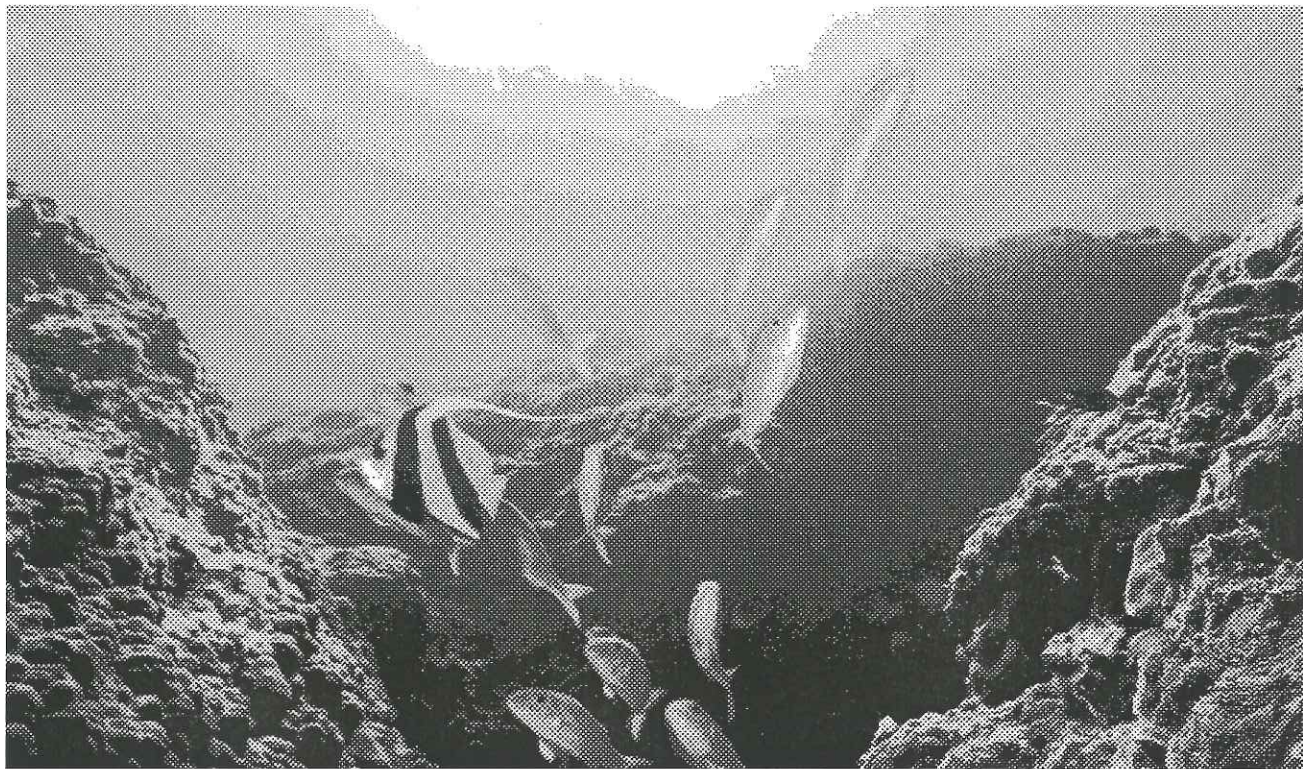


Y-NAC通信

1997.1.1.

No.5

元浦ダイビングガイド
屋久島本の世界
グヌン・ムル国立公園



北海道で感じたこと

通天閣で考えたこと

屋久島野外活動総合センター

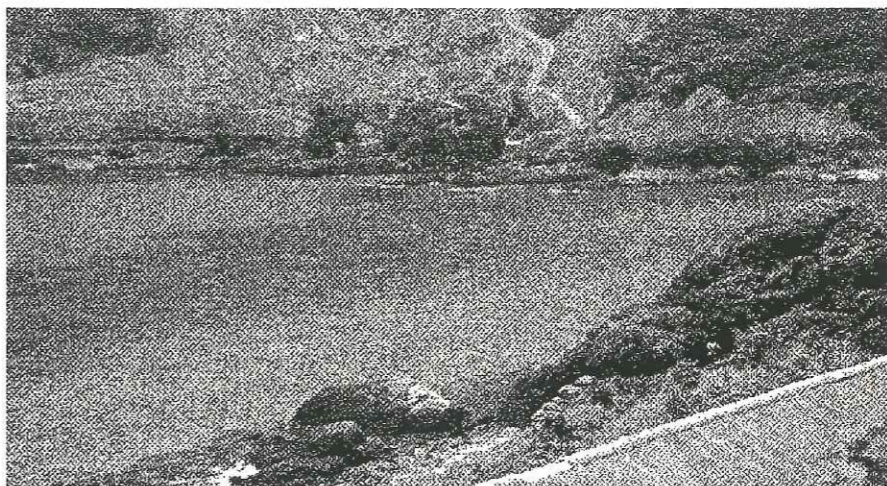
取締役営業部長

市川 聡

今年には機会があり、春には北海道、暮れには大阪を訪れた。北海道では、開発局主催の「エコツアーによる地域活性化」に関するシンポジウムに参加した。開発局主催ということもあり、開発志向の強い集まりかと思われたが、「エコツアーは、観光の一形態だ。」などということがはばかれるような、自然保護志向の強い集まりであった。むしろ北海道ではエコツアーは自然保護教育活動の一形態として認識されており、それを地域活性化にいかにつぎ付けるかが課題という感じであった。何より驚いたのは、北海道の自然保護に対する空気である。保守化の流れが進む中で、行政をも巻き込みながら、真摯に自然保護と立ち向かうリベラルな雰囲気健在なのである。北海道を離れて十年になろうとするが、忘れていた懐かしいものを思い出さされる気がした。

大阪ミナミの通天閣も強烈であった。駅から通じる商店街には、カウンターだけの立ち飲み一杯飲み屋があり、昼間からおやじが日本酒を飲んでいる。めし屋は棚から好きなおかずを持って来て食べる仕組みだ。五〇〇円の他人并は、グルメとは違うけれども、確実にうまかった。通天閣の二階の一角ではおやじが将棋を指しており、その脇にはちゃんと対局を覗き込んでいるおやじもいる。展望台から見下ろすと、大都会のど真ん中のはずなのに、洗濯物がそここに干してある。通天閣の周りに日常があり、生活の場としての人のぬくもりが感じられる。だからこそ通天閣は大阪のシンボルなのである。大学を卒業してから、いつのまにか都会といえど東京のそれも新橋、霞ヶ関界隈を思い描くようになってしまっていた。しかし大阪には大阪のどきつい個性があった。大阪はどんなに都市化が進んでも、東京にはならないのである。

東京からの距離でいえば、鹿児島と似た位置関係にある北海道も、日本第二位の大都会大阪も、東京とは一線を画することで、燦然たる個性のきらめきを見せていた。地方の時代といわれるけれども、地域の発展は小東京化することではない。むしろ個性が生み出した活力の中で独自の町を築き上げることではないだろうか。屋久島は屋久島や。東京のヒモにはならへんぞ。



元浦海岸

§

私が屋久島のダイビングポイントの中で一番多い回数を潜ったのがこの元浦のポイントである。その理由は、まず屋久島が北西の波の防波堤となってくれる。次に地形的にサンゴ・岩礁・砂地とそろっており、また内湾的要素が強い。そのため各種の幼魚や底生動物の種類が多い。そして最後に、水深が浅く、潮流もなく、安心してスノーケリングやスキューバダイビングが出来る。これらの条件から、フィッシュウォッチングを楽しむには最適な条件がそろったポイントなのである。

屋久島に来た頃、ここを潜ったことがあるが、当時それほど面白いポイントとは思わなかった。しかし、フィッシュウォッチングの面白さに目覚めてからは、この元浦が非常に面白いポイントになった。その面白さをここで少し紹介してみよう。

§

①浜 エントリーポイント
流木がたくさんあり、寒いときは焚き火の薪に事欠かない。休憩時間に外国製の漂着物を拾ってみるのも面白い。

②養殖試験跡 水深0.5m
以前養殖の試験のために立てた鉄筋の支柱が残っている。この辺りを這いつくばって見るとクサフグ・ニギギンポ・ボラなどを見ることが出来る。時にキビナゴ・アオリイカの幼魚が入ってくる。ニセクロナマコがごろごろしている。

③岩影 水深0.7m
大きなあまり浸食を受けていない角張った岩がごろごろしている。シマスズメダイの求愛行動や卵を守る姿を観察できる。

④マイクロアトール 水深1m
ハマサンゴのマイクロアトール化した群体がある。イバラカンザシがたくさん付いている。また、その中に混じっているカンザシヤドリを観察するのもまた楽しい。この辺りの岩の下には、タツナミガイがいる。是非見つけて墨はきを観察してみよう。

⑤ランデブーサイト 水深2m
イシヨウジがたくさんいて段になった下のところがランデブーサイトになっている。まだ産卵行動を観察したことはないが、よく卵を抱えた雄を確認する。

⑥広場 水深3~4m
少し広くなった岩場と砂地の境目。台風の後によく地形が変わっている。石と石の間の砂地にトゲアナエビがいる。アナエビ釣りに興じるのも良い。

⑦パイプウニの岩 水深1~3m
岩の上にはウニの掘った穴がたくさんあり、パイプウニがいる。どうやっても穴から引っ張り出すことが出来ない。この岩の下には、穴があり、大型のハナミノカサゴがいつも数匹いる。

⑧木琴サンゴ 水深5m
イタアナサンドモドキの群体がある。羽根状になった所を鉛筆で叩くときれいな音がする。大きさによって音程が違い、木琴のようである。ただし、これはサンゴではなく、ヒドロ虫の仲間が素手で触るとひどい目に会う。また、強く叩くと破損することもあるので優しく叩いてい

ソギンチャクが付いていて、よく成長したクマノミのペアが棲んでいる。

⑩スジウミバラ 水深4m
スジウミバラは他にもあるが、ここにはスジウミバラの大きな二群体とそれに並んでハマサンゴの群体がある。このハマサンゴに付くイバラカンザシは見事である。

⑬カゴカキダイの岩 水深5m
岩礁が途切れて少しひらけたところに岩がある。そこにはいつもカゴカキダイの群が付いている。岩礁にはスズメダイ類やチヨウチヨウオウオ類が付いてにぎやかで

ある。また、この辺りカマスの群がよくいる所でもある。

⑭クビアカハゼの園 水深4m
YNNACC通信4号でクビアカハゼとテッポウエビの共生について書いたのは、ここで観察したものである。数組のクビアカハゼとテッポウエビが生息している。

⑮ウネタケ群落 水深1m
ウネタケの群落がある。一面に生息しているが、触手を出している奴引っ込めている奴がまだらにいたりする。あるときは全部出していたりしてたりもす

る。ウミウサギガイも多い。

⑯テングハギの砂場 水深2m
浅い岩場からえぐれたような窪みに砂が堆積した砂地。ここは、テングハギがよく群れていて時々雄同士の喧嘩を見ることが出来る。ニシキブダイの雄もよくこの辺りで食事をしている。

§

浅いのでじっくりと観察できる。ここで目撃した魚達の面白い行動は数知れない。私のお気に入りのポイントである。たっぷり時間を取って観察して欲しい。
(松本)



イバラカンザシ

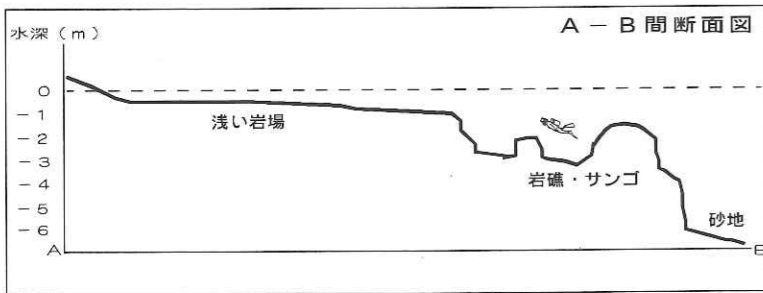
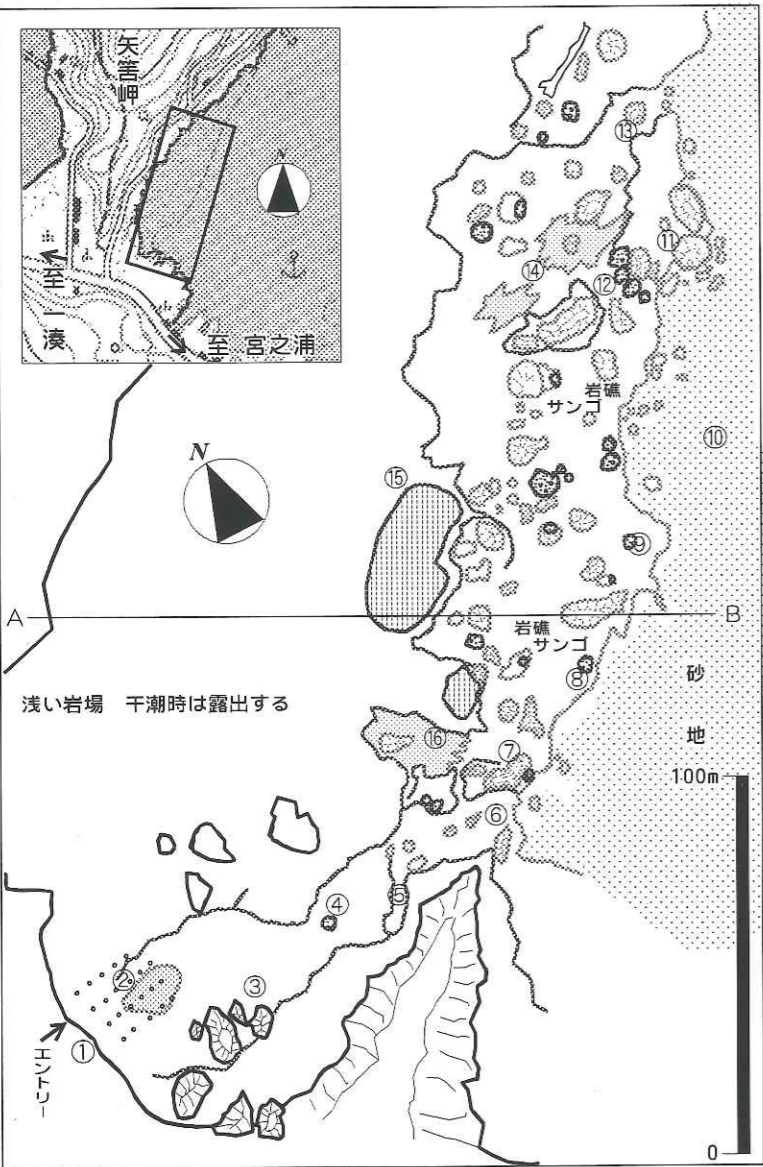
い音をだそう。

⑨ハキンコ岬 水深5m
ここは何故かオヤビッチャ(ハキンコ)等のスズメダイがいつも群れている。潮目が来たりすると中層から水面下辺りを泳いでいて、人が近付くとさっし降りていくときはなはだ美しい。

⑩砂地 水深6m
ヨメヒメジ・ヒトスジタマガシラの採餌行動を観察できる。また、よく探すところウベダルマガレイを見つことができ、雄同士のけんかや身のかくし方などを観察すると面白い。

⑪大岩 水深2~6m
よく目立つ大きな岩で小魚が付いている。大きなシライトイ

元浦ダイビングマップ





出席者

西山 佳寛 (生命の島編集人)
松本 淳子 (小瀬田幼児学級指導員)
小原 比呂志 (YNAC)

屋久島に関連する本は少なくないが、屋久島を的確に判りやすく解説した本はなかなかないものである。そこでYNACでは、島内多数の読み手()をそろえ、現在比較的手に入りやすいと思われるものを中心に主だった本の批評を試みた。ガイドブック類は今回は対象外とした。なおここで取り上げられなかったが重要だと思われるもの三点を文末に収録してある。鼎談は一月四日、新築なった松本邸で行われた。

千円くらいにできそうなこと言っただけ

松本 千円なら買おうよ!

西山 わかりやすいよ。全ページカラーだから見てたのしい。

小原 ただ視点、どうしても離れたところから屋久島を見たという感じが強いですね。

西山 やつぱり、「鹿児島県」の視点だよね。

小原 それと構成が少しごちゃごちゃしている。でも、屋久島関係ではちよつと無かった本ですね。

西山 こういうのは学校に配らないのかな、副読本なんかには。

松本 都会で屋久島行ききたいな、と思ってる人が読んだらさあ、「やつぱり行く」と思うよ、これ。

西山 なかなかねえ、県が作ってるから、広く出回ることはないでしょ。
松本 もったいなーい!せっかく良い仕事してるのに目の目を見ないなんてね。

「サル学の現在」 立花隆
平凡社 一九九一

小原 ヤクサル関連では、岡安さんという若手研究者に、屋久島の西部林道を歩きながらインタビューしているんですが、サルの社会は母系社会だという辺りに、女性の視点から切り込んでいった話が面白いですね。サルの群はメスを中心に成り立っていて、オスはそれを渡り歩いているだけだ、とか。

西山 あの中に書いてあったんじゃないかな、メスサルの研究が遅れたのは女性研究者が少なかったからだって。面白いよね、男の研究者はメスサルの顔の区別ができない。

松本 へーえ!

西山 で、女性はオスの区別はにがてなんだけど、メスを見分けるのがすごく早い。何なんだろうね(笑)

小原 ヒトの場合どうでしょうね(笑)。

松本 どうかなあ。例えば外国にいったとき男だからって男の人相の方が区別しやすいという話は、無いような気がするけど。

松本 ねえ!実験して見たくなるよね、それ!自分はどうかって。

小原 「ヒト」って種としてね。

松本 この本は、厚くて最初は読めるかなと思ったけど、けっこう面白く読めたよ。あのサルの子殺し、やつぱり一番シヨックだった。

西山 でもあの本は、淳子さん、寝ころ

がって読むの大変だったでしょう(笑)。
松本 重かった(大笑い)!
西山 すっごい腕力ついたんじゃない?持っている間はいいけどページをめくるのが(笑)。



屋久島の予習に おすすめだ

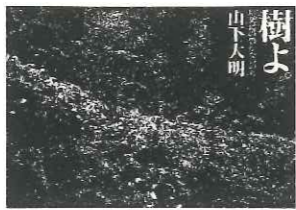
「屋久島」 湯本貴和
講談社ブルーバックス 一九九五

小原 これは著者の専門の、植物の生態の面白さから入ってる本でして、この本あたりからですね、エコリズムという楽しみ方を研究者の側から語り始めたのは、こんなに面白いことだらけの島なのに、滞在2〜3日ですることが無くなってしまおうというのには信じられないよ。優秀な研究者は面白い話の宝庫ですよ。

西山 これね、もったいないと思うのはモノクローナルですね。せめて写真数ページ頭カラーにするとかすれば。まあ、ガイドブックというよりは、各ルートの中にいろんな物語りがあるというつくりが面白いと思う。

小原 うん、そのなかの個々のエピソード

ドが正確で面白いから、屋久島に来るときに予習にいいんですよ。湯本さんの本を読んでみました、という人が実物を見て、ああ、これがあのことか、と腑に落ちて面白がってる。何事も予習復習がものをいう(笑)。



「樹よ」 山下大明 小学館 一九九二

小原 この写真集がでたとき、あれだけインパクトがあったのはなぜなんだろうね。

西山 観光写真じゃないからでしょう。

松本 うん、うん。

西山 他の写真集は、島にいて山に入ったりする人なら、あ、これあそこで撮ったなと解るものがほとんどでしょう?ところが山下さんののは、屋久島のどこかというのが解らない、にもかかわらず、全体が写っている、という感じがする。それと、なんか安心感みたいなものを感じるのね、写真の中に。

小原 ほお。

西山 ただ、ある人がいってただんだけど、山下さんの写真集は、登場するのが少し早すぎたんじゃないかと。というのは、えせ山下みたいな写真を撮る人がすごく増えた。



世界自然遺産の島 屋久島の植物

「屋久島の植物」 川原勝征 八重岳書房 一九九五

小原 屋久島の図鑑としていま手に入るのはいくらですか。

西山 もったいないね、写真に一部ピンボケがあったりして、労作なのは間違いないからね。

小原 コンセプトはどうも珍しい植物を載せるということなんです、普通の図

鑑にはあまり載ってない固有種の花とかね。スタジオとかマテバシイとかの普通の主要種で出てこないのがあるんです。

西山 じゃ定番の植物図鑑は何があるの?

小原 日本の、植物図鑑(笑)。平凡社の「日本の野生植物」(全六巻)とか。

松本 この図鑑、けっこう屋久島で撮った写真でてるよ。

小原 どれ?

松本 これ、「日本の樹木」山と溪谷社)これはあきないよね。でもこれ「屋久島の植物」(けっこう使いやすいよ。樹を調べるとき、こつちで調べる前にまずこつちにあたるんだよね。

小原 そうだね。感覚的には三分の二くらいは種がでてるから。

松本 で、もっと詳しく知りたいときにこつちを引くってかんじで。

小原 :やつぱり地域の図鑑がシリーズとしてそろって欲しいですね。

西山 そりゃYNACしかつくるところは(笑)

小原 魚は何とかなるかも:と社長が(笑)。



「屋久島の消えた谷」 津田邦宏
朝日新聞社 1986

小原 これはもともと朝日新聞の鹿児島版に長期連載された「緑の炭鉱」というルポなんです。僕は当時奄美大島に住ん

でたんですが、七〇回めくらいかこのときに気がついて、それから朝日をとりました。でもその前のものが読みたくて読みたくて結局鹿児島まで行って、図書館で全部コピーしました。ちょうど屋久島に住みたいなと思いついた頃で、津田さんという朝日の記者が小杉谷の歴史をまとめるんです。じつは山で暮らしてた人からの聞き書きを中心にもちろんここに出てこない話もいっぱいあるんですよ。この本のおかげで屋久島の国有林伐採の歴史が、僕らみたいにあつたものから来たものにも非常によくわかったのね。そういう意味ではかけがえのない重要な文献です。

西山 それはいま手に入るの?

小原 朝日新聞社だからねえ、あるんじゃないかとは思うけど。

幸田文 高田宏

小原 割と最近のもので、幸田文の「木」縄文杉に登ったときに幸田さんはもうかなりのお年で、最後には誰かに負われて登ったという(笑):そこところが非常に有名で:

松本 うん、そのエピソードは聞いたことがある。

小原 僕が縄文杉のガイドをやってた頃で、そこを読んできた人から、よく「もし歩けなくなったら、背負ってもらえるんでしょか」(笑)。ちよつとそれはと言ったら「でも幸田さんは:(笑)

西山 何という情報の受け止め方!

小原 それから高田宏「木に会う」の冒頭。三省さん、三郎さんといっしょに登って、縄文杉の根元で一晩明かしたときのことですね。これも有名。読んでる人

れがどっちなのかで歴史的に何か大きな違いが出てくるということ、どう読んでも無いみたいなね(笑)。それを何十ページも書いていてというのはすごいなあ(笑)。

小原 まあ(笑)、上陸の状況を明確にしたい、という気持ちはすごくよくわかりますね。ただその論拠が仮定に仮定を重ねてその上で、という感じなんで、そこらへんがこの本の価値をやや(笑)。

それからウイソソンの小屋の話。『田代善太郎日記』という明治の文献が引用されてまして、この人は小杉谷で営林署が伐採を始めるにあたって基礎調査をやった植物学者で、その調査日記なんです。それが、それによると、当時ウイソソン株が小屋になっていてそれで、株の天井に屋根が着いてあって、ゆかがあって囲炉裏まで切ったあつたというんですよ。それまでも島津時代の屋久杉伐採のときには切株で寝泊まりしていた、という話はあつたんだけど、言われてみればそりやそりだよな!と、目からウロコが落ちましたね。



40号の表紙はなんと檀ふみさんが登場

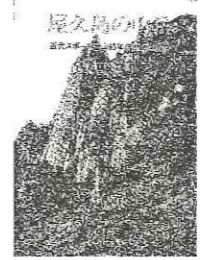
生命の島 一九八六 創刊 現在四〇号
松本 「生命の島」の創刊号を帰りに空港で買ってなかったらあたしたちこっちに来てないよ、ぜったい。
小原 それ大きいよね。…そう、屋久島

その他の注目本



「サルが山からおりてきた」 佐藤一美
ポプラ社 一九九四

屋久島の名産品ボンカン・タンカン。ヤクザルが荒らしてしまう「猿害」。「共存」はもはや不可能。「隔離」を確立するのか、「駆除」に走るのか。様々な試みが続く。知恵のある相手に対し、人間がどう折り合いをつけて行ってきたかを追うドキュメント。



「屋久島の山岳」 太田五雄
八重岳書房 一九九三

屋久島の岩・沢その他のバリエーション。ルートの記録を網羅した、重要な労作。類書もなく資料集として非常に価値が高い。



「やぶこぎまあの足音 屋久島編」
熊本ヤブコギマーズクラブ 一九八五

屋久島の沢登り記録集としてバイブル的存在。会員の手柄や、山行の様子が実に良く伝わってきて楽しい。Y.N.A.C.に少し残部あり。

「世界の自然遺産 屋久島」 田川日出夫
NHK出版 一九九五

植物生態学の権威が書き下ろした、屋久島の自然環境の現在を解説してくれる本。非常にためになるのでぜひ一読を。田川先生って結構おちゃめ、と評した女性読者も(?!?)。



新居にて、笑顔の松本社長兼カメラマン



チシオタケのなかま 淀川小屋付近 1996.8.24
傷つけると暗赤色の液が出る

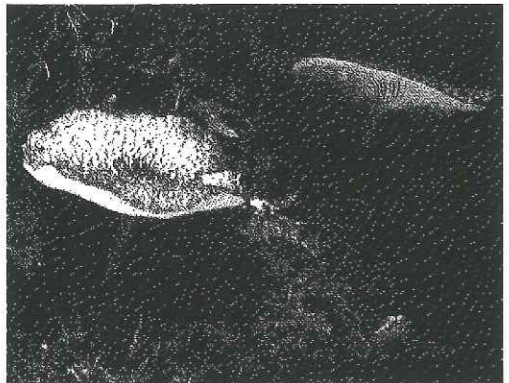
愛子岳のふもと、女川での沢登りのときのことです。(谷の側壁に)小さな洞窟のようになっているところがあり、なにか面白いものはないか、とくもり込んでいくと、じつととした暗闇の奥に岩の割れ目からのわずかな光をうけて、無気味にほの白くうかびあがるモノが…。



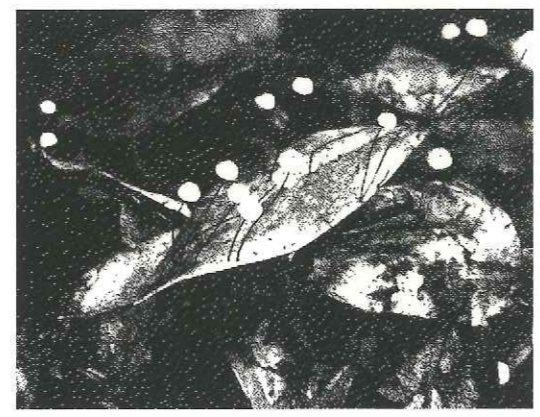
キノコの発生要因はさまざまですが、樹木と深い関係があります。樹木と共生するキノコの場合、あまり古い木にはつかない、照葉樹林にはさほど出現しない、スギ林には出ない、等の理由から、屋久島にはキノコが少ない、言われているようですが、照葉樹林でも蛇の口ハイクングコースの二次林のあたりなど期待で



淀川小屋付近ではヤブアカゲシメジというキノコをみつけました。傘の径が五センチ程度、その表面が赤茶色のさくくれ状の鱗片におおわれているのが特徴です。特に珍しいキノコではないようですが、図鑑をみると「…いまのころ、本州から、知られているのみである。」



ヤブアカゲシメジ 淀川小屋付近 1996.8.24
屋久島新産種!?



オチバタケのなかま 淀川小屋付近 1996.8.24
落葉を分解する

また、発光キノコ(熱帯性の)なども屋久島の夜の森で人知れず妖しい光を放っているのではないかと想いを馳せる私です。



さてキノコといえば、食べる楽しみがありますが、それは人間に限らないようで、ヤクザル達もキノコを食べているそうです。サルノコシカケにちよこんと座ったサルが、ムラサキヤマドリタケなんかをおいしそうにほおぼっている姿、みてみたいものです。



(編注)その後著者から「光るキノコ、アミヒカリタケは『日本のキノコ』(山と溪谷社)に宮之浦での写真がのっていました」とのお便りが届きました。屋久島でも光るキノコが!

有隣堂カルチャークラブ

ボルネオ・エコツアー開催のお知らせ

熱帯雨林・ボルネオを往く

旅行取扱: 有隣堂ボルネオ・ジャコワンタン
旅行主催: 有隣堂トラベルビューロー
運輸大臣登録一般旅行業第246号

問い合わせ先: 有隣堂生涯学習部
TEL 045-825-5539

●開講日時: 9年2月27日(木)~3月6日 6泊7日
●会場: ボルネオ島(マレーシア領サバ州)(成田空港集合・解散)
●参加費: 海では内容の希望により別れて行動します。ご希望のコースをご指定の上、お申し込みください。
①ダイビング希望(ライセンス取得者) 274,000円
②シュノーケリング(経験不要) 264,000円
(両コースとも、6泊19食代・成田-コタキナバル往復航空代金を含む現地移動費・全旅物参加費含む)
*お申し込み時にご予約金として30,000円をお支払ください。
●定員: 20人(最少催行7名)
●講師: 屋久島野外活動総合センター

赤道直下は魚群の楽園

渦巻くバラクーダ。沸き出すギンガメアジ。ここはダイバー憧れの海。大型の魚との遭遇に大感動し、無数のカラフルな熱帯魚に目を張る。潮風が涼しい快適な水上コテージでのんびりもよし。

熱帯雨林をキャノピーウォーク

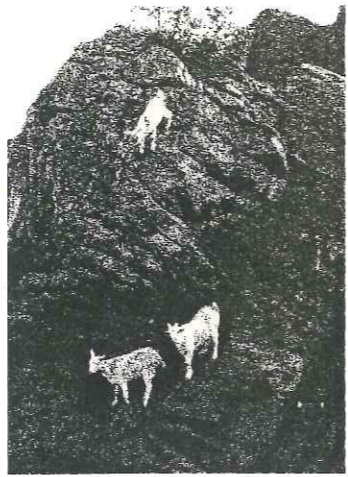
ダナンバレーは熱帯雨林の保護・調査を目的としたボルネオ有数の保護区。はるか上空に枝葉を広げる高さ60m級のフタバガキ科の木が立ち並び、締め殺し植物がその高木をさらに巻き覆う。熱帯雨林はゴージャスだ。この高木の樹冠をつなぐ研究調査用の吊橋。ここで地上からは何い知れない樹冠部の生態を観察。

オランウータン

ボルネオ特有の野生動物
マレー語で「オラン」は人、「ウータン」は森。つまり森の人。訪問するセピロック・オランウータン保護区は世界最大規模の保護区。ここでは母親を亡くしたオランウータンの子供たちが野生復帰のトレーニング中。朝食時間を訪問します。保護区を出て、キナバタンガン川にゆっくりと船を進めると、両岸の木々にはテングザル・ブタオザル・カニクイザル等が現れるかも。

(オプション) 東南アジア最高峰・キナバル山を歩く
●日時: 9年2月24日(月)~27日(木) ●参加費: 別途46,800円

つたのだ。
 こうなるとその出所が気になってくる。
 そこで知人に情報収集を頼んだ。彼女が上野動物園の飼育係長に聞いたところ、20〜30年前に屋久島で小型の野生ヤギを捕まえて、東京に連れ帰った。島嶼効果によって小型化したものと思われる。それを更に小型のヤギと掛け合わせて、子供が触って遊ぶのにちょうど良いおとなしいヤギを作った。それをヤクシマヤギと名づけている。詳しいことは忘れてしまったが上野が多摩動物園が発祥の地であろう。しかし今は純血種はいない。」ということだった。



屋久島の海岸の岩場を駆けぐるヤギ

WANTED!

ヤクシマヤギ
 並びにそれに関する情報
 賞金：おたのしみ

TEL 09974-2-0944. E-mail. SATOSHI_ICHIKAWA@msn.com



よろしく!

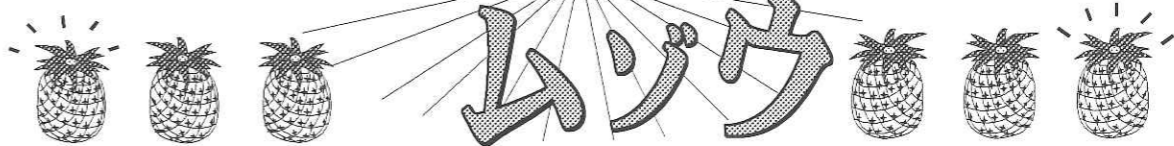
デバガメの技術

その探査の手は緩む
 ことがない!
 好評のシリーズ第5弾!

島 久 屋

カヅウ
 有象無象
 ムヅウ

不可思議の島に纏わる
 有象無象の物どもを求め、
 われらYNACは今日も行く。



日も傾き、トーンダウンした鉛色の海に体を滑り込ませていく。するとそこは異常な賑わい。屋の魚たちがタイムリミットを前に必死に最後の餌をかきこんでいる。まるで夕食の買い物客で賑わう夕方の市場のようだ。

海洋生態写真家中村宏治さんのお供でハリセンボンの産卵をねらって夕暮れの元浦海岸に潜った。

ハリセンボンの群はその気がないのか散ってしまい、どうも産卵シーンは押めそうもなかった。すると中村さんは素早くトラギスのオスに目をつけていた。中村さんが指さすのはダンダラトラギスのオスである。何となくそわそわとしている。岩の上に乗っては辺りを遠回り、また岩の上に乗る。中村さんがまた別の方を指さす。ダンダラトラギスのメスの登場だ。少し腹が膨らんでいる。準備万端のようだ。オスはメスの回りを数回回るとびたつとメスに擦りよって横に並ぶ。しかし、メスはまだ気が乗らないのか、あるいははじらしているのかすつと身をかわす。そんなメスの仕草にオスの気分は否応なしに高まっていく。

「そろそろいいじゃないか、だれも見てないし。」と耳元でつぶやいている。そんな愛の語らいをすぐそばでカメラを構え、「そろそろ来るか。」と固唾を飲んでのぞき込むデバガメどもが5人。

オスとメスがびつたり並んで動きが止まった。「来るぞー来るぞー」とファインダーをのぞき込み、あれの瞬間を息を飲んで待



ダンダラトラギスのペアリング

つ。

「来たっー!」と思った瞬間、ファインダーから二匹の姿が消えてしまった。あっと思っただけでファインダーから目を離すと彼らは水底から50〜60cm跳ね上がり、身をひるがえした。そこに白い煙が舞った。放精、放卵の瞬間である。そこにピカッとフラッシュが光る。中村さんのカメラである。「しまった。」と思ったがもう遅い。彼らはもうすでに海底に身を隠している。さつ、さつがブクダ。参った。見事にあれの瞬間を捉えていた。あの瞬間の内にタイミングと高さを見事に予測し、ジャストタイミングでカメラに納めてしまった。

もう1度別のメスとの産卵の瞬間もやはり撮り逃してしまった。生態写真とは、ただその珍しい現場に遭遇した偶然性だけではないのだ。魚のちよつとした仕草の中にその前兆を見つけ、ねばり、そしてその瞬間を狙う。今回、デバガメにも技術と経験が必要であることをいやというほど思い知らされた。やっぱり中村さんは凄い。(松本)

ヤクシマヤギ

今年の夏、おもしろい話を耳にした。ヤクシマヤギをウチで飼っている。という方が、お客様の中に現れたのだ。屋久島という主な哺乳動物は、シカ、サル、イタチ、モグラ、ネズミ、コウモリと相場が決まっている。そこにヤクシマヤギを飼っているという方が現れたのだから、驚きである。横浜から来た方がそもそもなぜヤギを飼っているのか不思議であったが、よく聞いてみると、学校の先生で、学校でヤクシマヤギを飼っているというのだ。「屋久島では、ヤクシマヤギなど聞いたことがない。」というので、「そんなはずはない。多摩動物園にもちゃんといて、檻の前にはつきりとヤクシマヤギと書いてあった。」とおっしゃった。そもそも学校のヤギは、横浜の、子どもの国、からもらってきたという。どうも関東西部にヤクシマヤギが出回っているようである。

元来、日本に野生のヤギがいたわけではない。移入されたものが各地で野性化したヤギとなったのである。確かに屋久島でも道端で野放しになっているヤギをよく見かける。中には、人は絶対近づけないような、断崖に囲まれた入り江でのんびり寝そべっているヤギもいた。しかしいずれも持ち主のいる飼いやぎだと思っていた。

それからまもなく、今度は石川県から来た方から、地元の観光牧場にヤクシマヤギがいたとの証言を得た。ヤクシマヤギは、一気に北陸まで分布域を広げてしま

幻の温帯針葉樹林

安房川の支流、荒川の標高1000メートルから上流には、まだかなり広い原生林が残されている。ここを訪れるのは簡単。屋久杉ランドの入口に車を置いて遊歩道に入って行けばいい。

奥へと進むほどに、ツガ、モミ、スギなど針葉樹の巨木が着生植物をどっさり身に着けて立ちはだかる。雲がかかり霧が立ち込めてくれば一層すばらしい。まさに屋久島を代表する森である。何か大きな生き物でも出てきそう。

以前からこの森を見るたびに、寂然としないものを感じていた。日本の山で他に似た森を見た記憶がないのだ。

照葉樹林・夏緑(落葉)樹林とはもちろん違ふし、亜寒帯性の針葉樹林とは植物の構成がまったく異なる。観光的には「屋久杉の森」などと言うが、別にスギばかりの森ではない。と、本来自来ブナ林になるはずなのに、たまたまブナが屋久島に入ってきたために、ヤクシマヤギがこんなにかかると出来たのだ、などという話を聞くと「ブナ? あんまりカンケーないんじゃないの、とかいってつい斜に構えてしまふ。この森の針葉樹の堂々とした態度を考えると、仮にブナがいたとしても、混交林のなかのお友達の一、という程度の役回りではないか。

いったいなんだこの森は? なぜ似た森が他にないのだろうか? と、不思議がっていた私に、ある日耳寄

りな話が届いた。

「屋久島の上半分の森は、温帯針葉樹林という。湿潤性の照葉樹林とともに「温帯雨林」のカテゴリーに入る」

温帯針葉樹林に温帯雨林! いいではないか。
 「日本の冷温帯〜暖温帯の降水量の多い山地、標高数百〜千数百メートルあたり、照葉樹林の上部から、落葉樹林に重なる位置にこの森は現れる。スギ、ヒノキ、ツガ、モミなどの温帯性針葉樹がブナなどの広葉樹と混生し、落葉樹林の代わりに成立することもある」

屋久島の他にそういう森はないの? 「小さいが木曾 赤沢のヒノキ原生林がある。日本海側には芦生、秋田などスギの自生地が所々かすかに現れるし、九州・四国の魚梁瀬(さかながせ)・紀伊半島・房総半島などにも痕跡的に現れる」

痕跡。何でそんなに無くなったの? 「要するに役に立つ木なので切り尽くされた。もともと四国・近畿・北陸・東海などの降水量の多い地域に広く見られたスギの森は、鉄器が使われ始めると同時に減少し始めたらしい。法隆寺など、奈良・京都の木造建築文化は近畿圏を広く覆っていたスギ・ヒノキの原生林に支えられて発展した。近代まで残されてきた温帯針葉樹林も明治以降の国有林伐採でほとんど姿を消し、人工林に置き換えられてしまった」

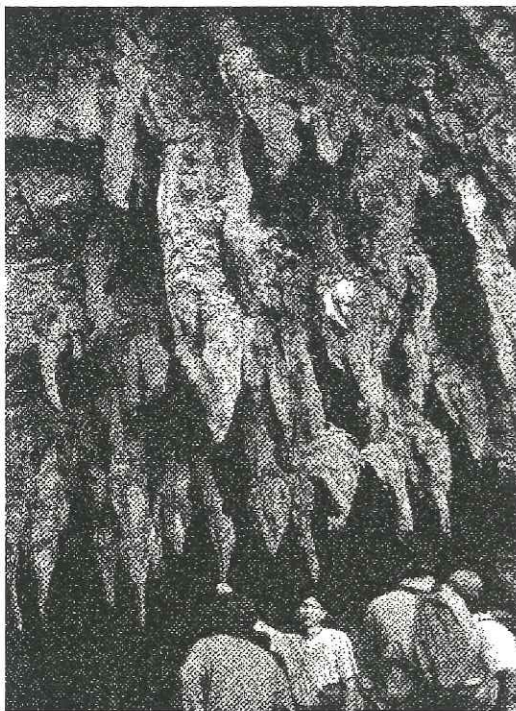
うんそうか、五重の塔の芯柱クラスが立ち並ぶ森が幻となってしまったんだ。また、もっとすごい話も出て来た。「スギ科などの温帯性針葉樹は中世代の生まれで、この仲間が生き残る暖かく湿った



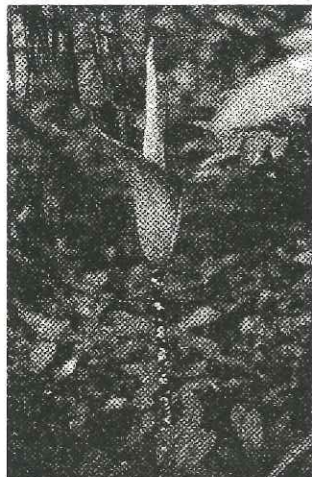
荒川原生林

森は、白亜紀の森の姿を残す貴重なものである」
 白亜紀ときた! 恐竜の森だ! 屋久杉ランドの妄想はあながち的外れでもなかったらしい。
 つまり屋久島のこの森は、かつて温帯日本に広く分布していた巨木のひしめく温帯針葉樹林の、ほとんど唯一の生き残りだったのだ。似た森など見るはずがない。日本最後といわれるままとまった照葉樹林と合わせて、屋久島はもはや日本唯一の温帯雨林の島と言えることが出来るかもしれない。
 折しも折り、鹿児島大学で「温帯湿潤林」〜温帯雨林と同じ意味〜に関する国際シンポジウムが行われるという知らせが入り、勢い込んで出席してみた。そこで見た驚くべき台湾からの報告。台湾大学の謝長富教授が美しいスライドに映し出す森の数々は、「これ、これ、屋久島じゃないの?」
 もしかすると、孤独な屋久島温帯針葉樹林の親戚が台湾にいたのではないかと、というわけで、無理を言って台湾にいった話はまた、こんど。(小原)

アカウヤガジュマルの仲間、
タートルケイブ出口にて



悪魔の指のような鍾乳石が重なる
クリアウォーターケイブ入口



ディアケイブ入口に咲いていた
シヨクダイコンニヤク。高さ
六〇センチほど、かなり珍しい

ムル国立公園研修日記

96/2/15

8:30 成田空港集合。松本、小原。(他に2名)
12:10 成田発。コタキナバルで乗り継ぎ

18:30 ミリ着。ホテルがキャンセルされていて
あせる

2/16

8:50 ミリ空港発
9:55 ミリ空港着。ボルネオアドベンチャー社の
ウィリーさんがお出迎え。ボートでホテルへ。
ビジターセンターで基礎知識を仕入れる
13:25 ラングケイブ 成長中の洞窟。わりと小さい
15:40 ディアケイブ 信じられない。驚異の大伽藍
16:40 ディアケイブ出口でコウモリの巨大な群が
17:10 餌を求めて出動して行くのを見る。人呼んで「
チャイニーズドラゴン」

2/17

9:45 ムル国立公園 管理事務所
10:40 ウィンドケイブ すばらしく美しい鍾乳洞
12:30 メリナウキャンプへ向かう途中ボート転覆
16:40 ピナクルズ登山を断念。迎えのボートで敗退

2/18

10:00 公園管理事務所で事故証明の手続きをする
12:55 仕方がないのでサイモンケイブで体験ケイ
ピング。活動を停止して「死んだ」洞窟

2/19

11:00 クリアウォーターケイブからタートルケイ
ブへ。アドベンチャーケイピング。地底の
川に行く。おもしろい
17:00 もう1度ディアケイブのドラゴンを見に行く
18:30 ディアケイブの帰り、日が落ちてしまい楽しい
ナイトウォークとなる。虫やカエルの声、熱帯
の夜の森。ムーンラットも見えてしまった。

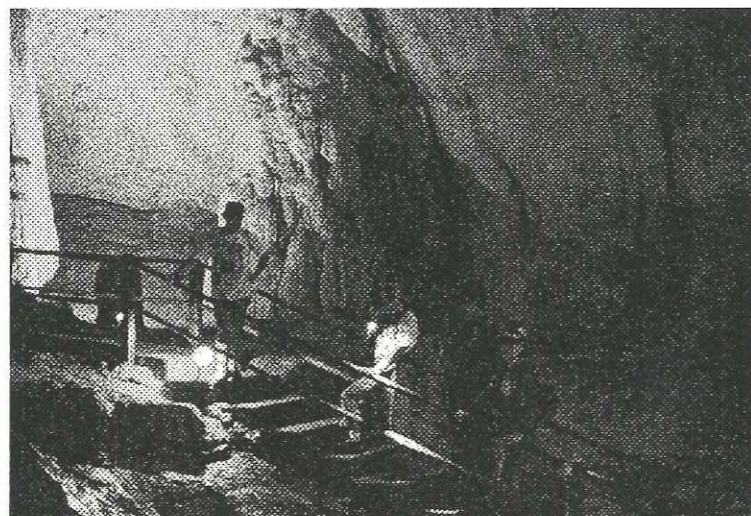
2/20

9:30 ウィリーさんの好意でホテル対岸の石灰岩塔
に登る。小さいが険しい
16:30 ムル空港発。ライスワインで再会を約する
17:30 ミリ空港着

2/21

8:30 ミリ空港発
10:20 コタキナバル空港着

クリアウォーターの内部
レディズケイブの内部

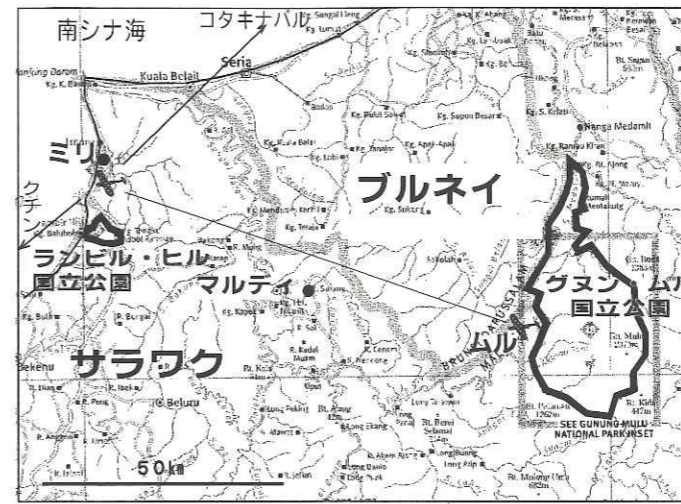


船を操縦するウィリーさん

GUNUNG MULU NATIONAL PARK

短報

松本・小原(てんぶくカルテット)

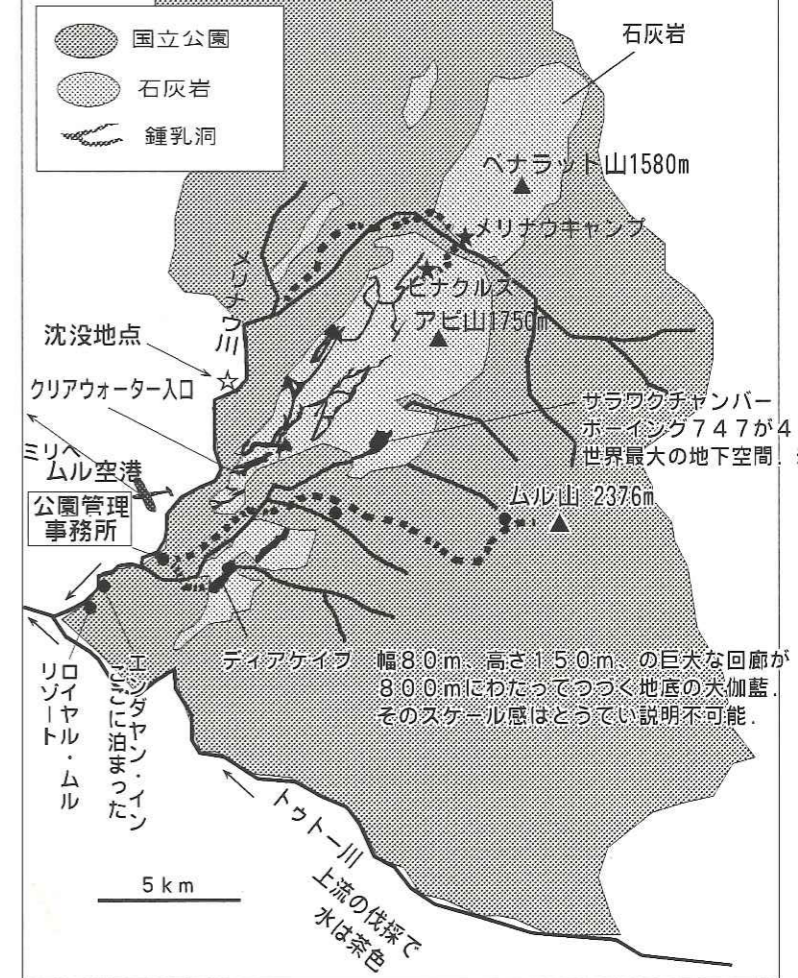


サラワク州の北端、ちょうどブル
ネイの裏といった辺りに、ボルネオ
脊梁山脈に連なるムル山系がそびえ
ている。最高峰のムル山(2375
m)は、原生林におおわれた堆積
岩の山だ。この山の西側斜面に寄り
添って、厚さ二キロ、幅が五キロを
越える石灰岩の分厚い地層がメリナ
ウ川の平原からつき出でている。
ムル山北西面を集水域とするメリ
ナウ川は、水源から流れ出た途端に
この石灰岩の壁にぶつかる。本流は
深い峡谷を削ってこの岩体を突破す
るが、一部の
水流は石灰
岩体に流れ
込み、網の目
を何層にも
重ねたよう
な複雑な鍾
乳洞系の中
を潜り抜け、
迂回してき
た水流と再
び合流する。
この鍾乳洞

系を「クリアウォーター・システム」という。
水系が全て解明されれば総延長でおそらく
世界2位に踊り出る、というのは国立公園の
ガイドの弁。
ムル国立公園は、ムル山塊と、このクリア
ウォーターや世界最大級の大伽藍ディアケ
イブなどの洞窟群を中心に五万二〇〇〇ヘ
クタール(屋久島よりも少し広い)の面積を
持つ。サラワク州観光の期待の星であり、四
つの洞窟がシヨウケイブとして公開されて
いる。また体験ケイピングやトレッキングを

中心にガイドシステムも整備されている。空港から公園や各
ケイブ入口などへの交通はすべて船(伝統的ロングボートに
船外機を載せている)を使うのが楽しい。また川べりの宿は
快適なもので、サラワクは伐採が激しく進行している地域で
あり、ムルは良かれ悪しかれ北部サラワク原生自然の核心部
になりつつある。
国立公園の指定は先住民ブナン族を締め出す形で行われ
たらしい。サラワク州政府は遊動生活をおくる先住民の定
住化政策を強引に推進しているが、成功していない。この問
題は解決されていない。

グヌン・ムル国立公園



サラワクチャンパー
ボーイング747が40機入る
世界最大の地下空間。未公開。

幅8.0m、高さ15.0mの巨大な回廊が
8.0mにわたってつく地底の大伽藍。
そのスケール感はどうも説明不可能。

CALENDAR

7月

10日 市川、屋久町春牧の新居に移る
 10日 北海道自然体験学校NEOSの屋久島
 ~14日 ネイチャーツアー（受け入れ）
 17日 ドゥスポーツ（檀野清司氏）の屋久島
 ~21日 エコツアー（受け入れ）
 19日 台風6号屋久島を直撃、森に大被害
 西部林道、土石流で不通に

8月

1日 松本、屋久島環境文化センター職員研
 習の講師をつとめる。
 22日 台風で延期の有隣堂「屋久島の森を往
 ~25日 く」夏編（受け入れ）

9月

上旬 松本・市川・渡辺、水中写真家中村
 宏治さんの取材サポート（ニュース
 23「中村宏治のちょっと底まで」）
 29日 台風21号北東の強風と共に4日間で
 1800ミリという恐るべき雨を降
 らせ、白谷林道土石流で不通に
 下旬~ 東洋工学専門学校建築エコロジー科
 10月上旬 屋久島実習の講師をつとめる。内容
 は、スノーケリング・登山・沢登り
 ・インタープリテーションなど

10月

3日 安房にY-NACカヌー艇庫完成
 10日 木風舎「屋久島の自然をまるごと
 体験」ツアー（受け入れ）
 17日 屋久島沖の「サッポウ」の「クワ」、屋久
 島東岸ツーリング後、市川邸で総会
 21日 小原、国際シンポジウム「世界の常
 ~22日 緑湿潤林生態系と人との共生」参加

11月

2日 有隣堂「屋久島の森を往く」秋編
 ~5日 （受け入れ）
 15日 松本邸、小瀬田に完成
 24日 松本・市川、環境庁の自然に親しむ
 集いの講師。だが雨で中止になり、
 世界遺産センターでスライド映写会。
 27日 松本、屋久町岳南中の文化祭でスラ
 イド講演
 28日 白谷林道、復旧

12月

9日 市川 神戸・大阪・名古屋へ
 ~14日 営業の旅
 9日~15日 小原 台湾の森を見に行く

編集後記

*30代最後のYNAC通信です。益救神社で厄払いをしても
 りました。今年は特に気を引き締めて頑張ります。（松）
 *今年は、明るく、楽しく、さりげなくをモットーに、リ
 ニューアルした私になりたいと願っている今日この頃です。
 また様子を見に来てください。（市）
 *「皆様からのお便り欄」を作りたいと思います。ツアー
 の感想はもちろん、屋久島の後でどこかに行って面白かつ
 たぞというような話もお聞きしたいです。こりゃ凄い！と
 という写真も歓迎します。よろしく！（小）



Y-NAC通信 第5号

ワイナックつうしん
 発行日 1997年1月1日
 発行 (有)屋久島野外活動総合センター
 住所 〒891-42鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦2446
 Tel/Fax 09974-2-0944

Y-NAC文献目録1996.7~1996.12.

執筆記事

★生命の島 第39号 1996年9月 P22-23

「海で出会った酷い奴ら」 松本毅
 好評のショートオムニバスその②。ガンガゼ（屋久島の
 海ではおなじみの、長く鋭いトゲのウニ）のシャープな写
 真が実に効果的。伝説の「ガンガゼをけとばしたスネ写真」
 も収録して「イラモをいじった手写真」と並べた方がより
 実用性が高まっただろう。ぜひあの「有毒のテナガダコに
 噛まれた指写真」や「アカクラゲに刺されて死ぬほど痛い
 写真」なども加えて松本版海の危険動物とその症例図鑑を
 創って欲しいものである。まだ撮ってない症例もそのうち
 揃えて、…いや、一人でやってよ。僕はコケで忙しくて…

★アウトドア NO.163 1996.10. 山と溪谷社

トレッキングガイド「屋久島」 小原比呂志
 1/4頁のちよい記事。感性のマスターベーションなど
 ゴミだ！とタンカを切りたかったのだが、不発。メインコ
 ースとして紹介した白谷雲水峡は発売と同時に台風が林道
 をえぐりとってくれるし、「土石流で不通、一時的に自然度
 アップ」の西部林道は開通してレンタカーと工事の車がす
 いすい走っているしで、こっちはゴミになってしまった。
 アウトドアはこのところ読みごたえのある号が続く。

★グリーンレター NO.18 1996.10 富士フィル

ムグリーンファンド 特集 エコツアー p20-22「エコツ
 アーの舞台裏」 市川聡
 日本のエコツアー業界はあれこれ言う人は多いが、実働
 部隊が少ないので、零細YNACの実例もひっぱりだこ、
 市川大活躍、というほどでもないか。ところで白神では夕
 食の後、焚き火でビール飲んでたら叱られるらしい。確か
 に寒い中で冷たいものを飲んだってあまりうまくないだろ
 う、という問題ではない？ 屋久島では焚き火で湯を湧かし
 て三岳で「だいやみ」だ。（小原）

from Y-NAC

☆1~3月のスケジュール

- 1.18. 小原、ボルネオ参加者を対象に、函南原生林で「予習会」
- 19. 小原、横浜の有隣堂で屋久島とボルネオツアーのスライド
 説明会。問い合わせは前頁の広告欄参照。（無料）
- 1.31 松本「自然が先生」全国市民の集い 分科会4「海に
 2.2. でかけよう」で事例発表。ドゥスポーツの檀野氏、
 西表の中神氏らと熱いバトルが！ただし有料。
 問い合わせは 03-3475-7738. いそいで！
- 2. ボルネオ サラワク州ムル国立公園で研修
- 2.24. 有隣堂ボルネオエコツアー、マレーシア サバ州 にて
 前頁広告欄参照。
- 3.1 市川、第1回住高環境教育ミーティング（九州地区）
 2. で事例発表など担当。問い合わせは（財）
 せたがやトラスト協会の杉浦さん03-3789-6112まで

☆料金値下げのお知らせ

96年10月1日付けで料金を値下げしました。エコバック
 3日間（1日+1日+1日）料金が42,800円、1日メニュー
 料金が15,000円となります。リピーター・学割・家族割引きな
 どのほか、日数や人数による割引きもあります。詳しくは
 YNACまでお問い合わせください。